

読売新聞に紹介されました！

長年実施しているスウェーデン研修で、優れた介護を習得する取り組みについて「赤門グループホーム神明町ガーデン」原田管理者および「赤門ヘルスケアグループ」が読売新聞社より取材を受けました。その内容が読売新聞（2月28日版）くらし健康ページで紹介されました。

12版
くらし 32

介護の質

■実技の模倣試験

右半身まひのお年寄り
が、食べこぼして服を汚し
た。食卓から車いすに乗せ
てクローゼットの前へ。着
替えまで所要時間は5分以
内……。そんな課題に、干
葉稲佐倉市の有料老人ホー
ム「佐倉くすくすの里」の
職員松本志志さん30が
挑戦した。

高齢者役の職員に、「服
が汚れたので着替えましょ
う」「どちらの服がいいで
すか」などと意思を確かめ
ながら、着替えを終えた。
スタッフウオッチを握る指
導役の職員が「早くできま
した。時間ももうよいとい
いますよ」と声をかける。松
本さんは、ほっと顔をほこ
らせた。

介護福祉士の国家試験を
受験する職員向けに行われ
た実技の模倣試験。昨年合
格した職員が指導し、本報
記者が撮影した。

「支えたい
介護の現場から

この模倣テストを始めた
きっかけは6年前、受験者
が先輩職員に頼んだ勉強会
だ。好評だったため、ホー
ム側も会場や参考書を用意
するようになった。試験3
か月前の10月ごろから、月
に2回ずつ講義が行われて
いる。

全国平均の合格率をみる
と約50%。これに対し、同
ホームのここ数年の合格率
は70%を越えている。当初
は30人ほどだった介護福祉
士が、80人を超えるまでに
増えた。

松本さんは、ホームヘル
パー2級と社会福祉士の資
格を持つものの、4年前に
同ホームで働き始めるまで
介護の経験はなかった。高
齢者と触れ合う仕事にやり
がいを感じ、「介護福祉士
の資格も取って専門性を高
めたい」と意欲的だ。来月
には実技試験に臨む。

「働いた後の勉強はつら
かったけれど、先輩や仲間
の励みでがんばられた。出
身の傾向やポイントなど、

資格取得・海外研修で向上

介護福祉士は、介護の国
家資格で、福祉系高校を卒
業、あるいは3年以上の実
務経験を経て国家試験に合
格するか、国が指定する養
成施設を卒業すれば与えら
れる。

2006年、ホームヘルパー
から介護福祉士を目指す上
位に介護職員基礎研修が設
けられた。12年度以降は、養
成施設の卒業生にも国家試
験が課せられ、実務経験3
年以上で受験する場合も、
半年間以上の講習が義務づ
けられる。

介護福祉士 国家試験必須に

「赤門グループホーム
神明町ガーデン」(千葉縣
船山市)管理者の原田春美
さん(54)は、2006年末、

「赤門ヘルスケアグループ」
では、10年ほど前から職員
を派遣している。原田さん
は同市でホームステイしな
がら、約10日間、施設の見
学や実習を行った。

市内のグループホームで
学んだのは「コンタクトマ
ン制度」。高齢者がれぞれ
れに対し、中心となってか
かわる担当者を決め、個別ケ
アを行うもので、「職員は、
認知症の専門知識と入居者
に対する深い理解がある
が、あまり入居者に干渉し
ない。皆入り居者の意思を
優先させる」とが印象的で
した」と振り返る。

日本の介護が難る点にも
気づいた。「食事は市の給
食センターで作られ、実
シンプル。日本では、職員
が四季折々の食材を使って
入居者とともに調理して食
べます。すばらしいと再評価
しました」と話す。

「高齢者は自由である」と
を再確認。「家族との関
係を大切に」など、スウェ
ーデン研修で学んだことを

10か条にまとめ、研修を
どで発表している。

日本介護福祉士の石橋
真二会長は「高齢社会を迎
え、介護の質、量ともに上
上が求められる。指導的立
場の職員を育成すれば、事
業所全体の職能を抑える効
果もある。ただし、質を上
げるには、相応の地位や賃
金などの処遇改善も欠かせ
ない」と指摘している。

「赤門ヘルスケアグループ」
では、10年ほど前から職員
を派遣している。原田さん
は同市でホームステイしな
がら、約10日間、施設の見
学や実習を行った。

「赤門ヘルスケアグループ」
では、10年ほど前から職員
を派遣している。原田さん
は同市でホームステイしな
がら、約10日間、施設の見
学や実習を行った。

「赤門ヘルスケアグループ」
では、10年ほど前から職員
を派遣している。原田さん
は同市でホームステイしな
がら、約10日間、施設の見
学や実習を行った。

くらし 健康



介護福祉士の実技模倣試験で、高齢者役の職員の上着を替える松本志志さん(手前右)。(千葉縣稲佐倉市の「佐倉くすくすの里」で)

ヨミドクター 医療相談室

テーマ相談コーナー新設

読売新聞の医療・介護・健康情報サイト「ヨミドクター」は4月から、有料登録した読者を対象として、「医療相談室」内に「テーマ相談」コーナーを新設します。

毎月、二つのテーマについて質問を募り、毎月、サイト上で集中的に回答を掲載していきます。

3月に質問を受け付けるテーマは「皮膚の病気」と「腰痛」です。

yomiDr.
ヨミドクター
<http://yomidr.jp>

回答者は、皮膚科が東京池田病院皮膚科部長の江藤隆史さん、腰痛が東京医科歯科大整形外科教授の四宮謙一さんです。

テーマ以外の質問も常時受け付けています。質問するには、読売新聞の購読者で、会員制有料「ヨリ」の会員ID取得と有料の「プラス登録」をする必要があります。プラス登録には月額2,100円がかかります。

入会登録の問い合わせは、ヨリ事務局デスク(03-3246-1100)平日午前9時~午後6時へ。

「支えたい 介護の現場から」は3月28日の予定です。

お便りは早100・8055読売新聞東京本社社会保険部へ。Eメールは ansin@yomiuri.com

＊徳田美保著「はやとくん、おうちに帰ろう」染色体の異常で全身にたくさんの重い障害を持って生まれた「はやとくん」。母親である青者は、自宅で見守ることを決意する。胎の発育が不十分で、医学的には「育

える力がない」とされた次男に、愛情を注いだ家族の300日。はやとくんを亡くした青者の心に浮かんだのは「生まれてきてくれてありがとう！」の言葉だった。1500円(税別)。書籍祝賀別。